

スポーツをすることと、 生きること

『炎のランナー』

1981年、イギリス映画、124分
製作/デイヴィッド・パットナム、
監督/ヒュー・ハドソン
出演/ベン・クロス、イアン・チャールソン、
イアン・ホルム
DVD/20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント



1924年パリ・オリンピックでの英国陸上ゴールドメダリストの物語。最高学府ケンブリッジと一緒に入学した二人のランナーが、友情を育みつつオリンピックをめざして精進する。二人とも100mランナーだが、共に金メダルを獲得する結末になる。そんなことがあり得るのか？ 英国では今も語り継がれる有名なトゥルー・ストーリーだという。

エイブラハム（ベン・クロス）はユダヤ系である。言われなき差別感がまだ幅をきかせており、彼は早く「走る」ことで差別感と戦い、世間を見返そうとする。事実、彼の實力に偏見は薄れ、古い体質の大学も偏屈なユダヤ青年を認めざるを得ない。いつか美人のオペラ歌手とも愛情を交わすことになる。

「走る」ことでつながるもう一人リデル（イアン・チャールソン）は、聖職者をめざす敬虔な青年である。彼にとっては、走ることも信仰も、精神の集中と多大なエネルギーが必要という点で同じ。「走るとき、僕は神が喜びたまうことを感じる」から、競技と信仰の相互作用をめざす。

動機は異なるが、二人はめでたくオリンピック代表に選出される。だが、パリに着くと100mの予選が日曜日だとわかる。リデルが宣言する。「キリスト教伝道師にとって日曜は安息日で、そんな日に走るの神への冒瀆。だから僕は走らない」。代表団の役員が困惑するなかで、エイブラハムが妙案を提示する。400mが平日に実施されるから、持続力のあるリデルはそれでも力を発揮できるのではないか。「400mで走れよ」。リデルが応える。「日曜日でないのなら、僕には走らない理由がない！」

奇跡が起こるとでもいうのか、アメリカの強豪に競り勝って二人は金メダルを獲得する。一人は差別感に打ち勝ち、

一人は神との一体感を我がものとする。

日曜日に走ることが神の意志に反するというリデルの主張に、私ははじめ戸惑った。競技と信仰の両立は可能はずだ。だが、次第にリデルの気持ちを理解した。リデルの神への思いが本物であり、それを描ききる映像表現が説得力を持つからである。実に美しい。走る姿にスローモーションが多用され、クローズアップが効果的に挿入され（市川崑監督『東京オリンピック』の手法が随所に採り入れられているのがわかる）、二人の生き方の違いが、見る者の心のなかにまで自然に染み通ってきて、いつしか感情移入している。

84年前のオリンピック選手のユニホームにも目を引かれる。いくつかのアカデミー賞を獲得した名作だが、衣装賞も射止めている。まるで小学生が着るようなウエアを身にまとい、地方色豊かな感じさえする。のどかな時代だったのだ。日曜日に走る云々、種目変更が可能なのか等々、現代オリンピックとは雲泥の差だ。「平和を！」と言いながらも各国が異常に神経を高ぶらせる命がけのオリンピックとは異なる。スポーツ根性物語ではないのだ。まさに人間ドラマ、スポーツをすることと、人がどう生きるかが噛み合っている。人間味にあふれた良き時代の青春像を、みごとに再現してくれる。感動する。

プロフィール

吉村 英夫（よしむら ひでお）

1940年生まれ。映画評論家、愛知淑徳大学教授。早稲田大学卒業後、三重県立高等学校で教鞭を執る。34年の教員生活を経て退職、現在に至る。著書に『完全版男はつらいよの世界』『老いてこそわかる映画』などがある。『講義録・黒澤明を観る』を近日刊行予定。